様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：　基盤研究（C）
研究期間：　2006～2008
課題番号：１８５２００１６
研究課題名（和文）親鸞の思想形成におけるインド浄土教の意義にかんする倫理思想史的研究
研究課題名（英文）A study on a historical background and significance of Indian Jodo-Buddhism in the Formation of Shinran's Thought

研究代表者
宮島　磨（MIYAJIMA OSAMU）
九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：70241453

研究成果の概要：本研究は、平成１５ー１７年度にかけて行った「親鸞の浄土観の成立および構造にかんする倫理思想史的研究」をふまえた上で、さらに中国浄土教からインドの大乗仏教思想への遡行を試みることによって、時間・空間両軸からの充実をはかり、それによって、さらに構造をより明確にすることを目的としたものであり、ひいては大乗仏教思想の流れの中で親鸞が占める位置を明らかにすべく、主に以下の二つの面から、龍樹・世親を代表とするインド浄土教の祖師が親鸞の思想形成に与えた影響を解明した。

（１）「インドー中国仏教における浄土教の位置」

（２）「龍樹と世親の親鸞思想における位置」

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	９００，０００	０	９００，０００
２００７年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
２００８年度	４００，０００	１２０，０００	５２０，０００
年度			
年度			
総　計	１，８００，０００	２７０，０００	２，０７０，０００

研究分野：倫理学・日本倫理思想史
科研費の分科・細目：哲学・倫理学
キーワード：大乗、浄土教、龍樹、世親、曇鸞、菩薩、五念門、自利と利他

１．研究開始当初の背景

龍樹と世親は、親鸞がいわゆる「七高僧」の最初に掲げる浄土教の祖師たちである。従来の研究において明らかにされている通り、親鸞は龍樹（『十住毘婆沙論』）からは「難易二行道」における「易行」の思想を、また世親（『浄土論』）からは曇鸞の注釈をさらなる媒介としつつ「五念門」の体系にもとづいて「他力」や「利他」の思想を継承したとされる。その意味で両者が親鸞の思想形成においてその骨格ともいうべき位置をしめていることは明白である。

しかしながら仏教思想史上においては、龍樹にせよ世親にせよ必ずしも“浄土仏教者”として明

確な位置づけがなされているとは言いがたい。両者ともに浄土信仰を有しつつも、仏教思想史の上からは、龍樹は『中論』に代表される大乗「空」思想の大成者であり、また世親は瑜伽唯識思想の大成者であるというのが、定説的な両者の位置である。

であるならば、このふたりの仏教者がなぜ“浄土仏教者”である親鸞において重要視されたのかが問われねばならないが、従来の研究はインド思想史の側面に焦点をあてて、龍樹の「空」思想や世親の瑜伽唯識思想そのものの分析に偏るか、さもなければ親鸞による受容の側面に焦点をあてて「易行」や「他力」・「利他」の思想の意味づけに偏るかのいずれかであるケースが大半であって、龍樹・世親の思想のそれぞれの核心と、親鸞思想の核心との間を相互に媒介するような研究事例には乏しかった。

２．研究の目的

そこで本研究では主に以下の二つの観点から親鸞の思想形成においてインドの浄土教が果たした意義を解明することをねらいとした。

（1）インドー中国仏教における浄土教の位置づけ

先行研究においても、浄土思想自体の発生基盤については依然として不明な点が多く、とりわけ『観無量寿経』の成立についてはいまだ定説をみない状況にあるが、本研究は龍樹や世親が親鸞に及ぼした影響から、遡行するかたちでインドー中国における浄土教の位置、さらには「空」、「涅槃」といった仏教の根本教説と浄土思想との関係を、龍樹と世親の思想、特に世親の『浄土論』の受容という観点に焦点をあてて解明することを目的とした。

『浄土論』は中国浄土教の祖師ともいうべき曇鸞の『浄土論註』を通じて、中国国内で広く受け容れられるに至った著作であるが、まさに曇鸞自身が苦慮したように、「空」、「涅槃」の根本教説を浄土教へと接続させ、色も形もないさとりそのものの世界（「無為涅槃界」）という特異な浄土観を展開するに至っている。

この「無為涅槃界」が中国浄土教や親鸞思想に及ぼした影響ははかりしれないが、このように曇鸞によっていわば変質を余儀なくされた浄土観の根幹には、そもそも”彼岸”を説く浄土教がいかような意味において「仏教」たり得るのか、という根本的な問題が横たわっており、大乗教徒であった龍樹や世親が同時に“浄土仏教者”たりえたことの意味の解明もひとえにここにかかわっている。

（2）龍樹と世親の親鸞思想における位置づけ

（1）の課題を考慮し、親鸞が引用する文献がそれぞれの祖師（龍樹・世親）の思想構造全体の中で占める位置をおさえつつ、親鸞の思想形成に果たした役割を考察することが目的であった。

具体的には龍樹と世親のそれぞれについて以下の項目にかかわる研究を行った。

①龍樹の「歓喜地」や「即位入出定」、「不退位」といった思想、さらには『大智度論』における仏・菩薩観や念仏観が親鸞においてもつ意義の解明。

②世親の『浄土論』における「安楽国」の思想や「願作仏心」すなわち仏にならんとする志(「自利」の心)が同時に「度衆生心」(「利他」の心)であるという自利と利他の相即構造の解明。

本課題も（1）の考察を背景におくならば、単なる個別例の研究によっては明らかにしえない全体像の解明に寄与しうると考えた。

このように本研究は.“龍樹・世親→親鸞“という方向のみならず、”親鸞→龍樹・世親“という方向をも合わせもっている点に従来の研究にはない特徴があり、これら双方向的な探究によって、龍樹・世親における浄土思想の意義を解明されるとともに、それらが親鸞の浄土観や救済観、信心観などに与えた意義. ひいては大乗仏教思想史上の

親鸞思想の位置を総合的に明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

（1）インド浄土教の祖とされる龍樹、世親自身に固有な仏教思想、ならびに彼らの浄土教思想それ自体に即した研究

（2）それらが親鸞の思想形成において果たした役割に即した研究

（1）、（2）の研究が同時に、しかも相互に関連づけられるような方法においてなされることを目指した。

４．研究成果

（1）（平成１８年度：研究成果）

世親の思想を中心にその媒介者としての曇鸞の思想史的位置と親鸞への影響関係を解明した。

インドの世親が往生行として大成した「五念門」の行体系は、単に自己一身の安楽さをもとめる浄土希求ではなく、一切衆生の救済を志向する菩薩たらんとする厳しい自覚を伴うものであり、その意味で大乗菩薩道をふまえたうえでの浄土信仰の表明であったが、それを継承した中国の曇鸞においては「無為涅槃界」という特異な浄土観のもとに阿弥陀仏の「他力」が強調され、その結果として菩薩の活動態にかんしても「往還二廻向」というダイナミックな往生観を生むこととなった。

曇鸞によるこの「他力」の強調は、行者が大乗菩薩道の担い手として浄土往生を願う「願生」という事態のうちに既に阿弥陀仏の誓願力が及んでいるという独自の理解をもたらし、親鸞の「他力」思想に深い影響を与えた。さらに「五念門」の行主体を阿弥陀仏の前身である法蔵菩薩ととらえる親鸞の「真実信心」理解において、曇鸞の提唱した「二廻向」観は「他力廻向」という独自な廻向観へと徹底されるに至った。

（2）（平成１９年度：研究成果）

曇鸞、世親に先立つ龍樹の思想史的意義を究明した。

龍樹の説く「難易」二道の背景にも大乗菩薩道が控えており、浄土往生を願う「願生」の菩薩には「利他」への強固な志（「丈夫志幹」）にもとづいた厳しい行が「難行」として求められていた点は世親にも受け継がれるポイントであった。さらに、阿弥陀仏を憶念するという「易行」としての「念仏」は、この「難行」の実践に際して―本来は「利他」を旨とすべき―菩薩行の行者に絶えず「自利」へと陥る傾向性がつきまとうがために説かれた手だて（「方便」）であって、決して安直な逃げ道という意味での「易行」ではなかった。「願生」の菩薩に求められる「念仏」は、いわば行者にとって模範となる阿弥陀仏による衆生救済活動の全貌をくまなく観念すること（「観察」・「憶念」）だったのである。

ここには大乗菩薩道が浄土思想と融合する端緒をみることができるが、自利」への顛落という問題は親鸞において「自力」に対する懼れの念へと主題化された。この懼れは、自らの器量にたよって「菩薩」たらんとする志それ自体に対する根本的な反省を生み、「他力」のさらなる徹底化をもたらすに至った。

（3）（平成２０年度：研究成果）

以上の研究は思想史的には、インド浄土教の影響下に、中国浄土教を経て「他力」思想が徹底化し、その極点において大乗菩薩道がひとつの完成形をみるに至ったことを証立てるものであるが、その背景には親鸞独特の「凡愚」観がひかえていた。

衆生を器量の劣る「凡愚」とみなす親鸞において、阿弥陀仏の「他力」の本質は、本来衆生が修めるべき「五念門」の行体系を阿弥陀仏自身が十全に成し遂げ、その功徳を衆生にむけて差し向けているというところ（「他力回向」）にある。親鸞

において、あらためて「信」が重い意味を持ち、またそれまでの「五念門」において諸仏・菩薩を憶念したり、浄土の荘厳を観想する「観察」行とされていた「観」が、阿弥陀仏の本願の謂われに対する「聞」へと変容してくるのは、まさにこの＜行＞主体の転換においてであり、そこには―龍樹ー世親ー曇鸞を一貫していた―「願生」の菩薩たることへの断念があった。

「聞」はまた―「凡愚」である己れに目を塞いだまま―過去久遠劫来「自力」による流転を重ねてきた自己に対して「方便」として差し伸べられた諸仏・諸菩薩のはたらきに対する思いをも含み、阿弥陀仏の誓願へと自らを押しやることで、ともすれば「自力」へと顚落しがちな「信」を立て直す意味をもにない、「来迎」や「正定聚」についての独自な理解や、「宿業」という自己理解を導いてもいた。

以上の論証を通じて、インド浄土教を経て形成された親鸞の思想は、すべての衆生に対する「大慈大悲」を実現せんとする「大乗菩薩道」思想のひとつの極点であることが示されたと考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①宮島　磨

「親鸞における＜行＞主体の転換構造―龍樹、世親、曇鸞を媒介に―」

『哲学年報』　第６８輯　　１０９−１５５頁

（２００９）査読無し

②宮島　磨

「大乗菩薩道としての浄土願生　「難易二行」をめぐって　―龍樹から親鸞へ―」

『哲学年報』　第６７輯　　４１−７５頁

（２００８）査読無し

③宮島　磨

「「自利」と「利他」を架橋するもの―世親から親鸞へ―」

『哲学年報』　第６６輯　　４１−８０頁

（２００７）査読無し

６．研究組織

(1)研究代表者

宮島　磨（MIYAJIMA OSAMU）

九州大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：７０２４１４５３